



写真 1 津和野藩当主の参勤交代に利用され、当時敷かれた石畳は400年経った現在も往時をしのばせている。写真 2 「佐伯観光ボランティアの会」の皆さん。石畳の古道を楽しんでもらうため、街道のルートはもちろん、山の基礎知識や救急救助などの研修を受け、日々活動中。

佐伯観光ボランティアガイドの会で代表を務めている下橋さん。佐伯には、江戸時代に参勤交代で使われた石畳が残る津和野街道が存在する。その街道を生かして地域を活性化しようと3年前に会を立ち上げた。会員は現在22人。観光ガイド養成講座を受講し、街道のツアーでそれぞれの得意分野を生かした知識を提供している。下橋さんは、郵便局に勤務し、昭和50年に旧佐伯町に越してきた。仕事一辺倒で過ごしてきたため、63歳で退職したときには地元のことをまったく知らなかったという。

「恥ずかしいことですが、それまでは朝早く出掛けて、夜遅く帰るといって仕事中心の生活だったため、知人すらおらず、地元のことをまったく知らなかったんです。だから退職後は、まず地元のことを知ろうと思いました」とそのきっかけを話す。

観光協会が行ったガイドの公募を知るとさっそく申し込んだとのこと。退職当時は腰や膝の痛みで1時間も歩けなかったという下橋さんだが、現在は9km以上もある街道のコースを難なく往復する。また、健康づくり推進委員やウォーキングリーダーも務めている。



しもはし・ひろのぶ
下橋 弘信さん
(68歳・峠)

ボランティアガイドという生き方！

Challenge 1

400年前の姿を現代に残す石畳の古道「津和野街道」。現存する地域の宝を次の世代に残していきたいと、ボランティアガイドを結成！

「今では筋肉もつき、登山もします。余分な脂肪が落ち、退職時から体重が15kgも減りました。今では膝のサポーターも必要なくなりましたね」。

えたときが、一番うれいですが、その一瞬は、わたしにとりてかけがえない瞬間です」。

現在では、自分から地域に向くことで知り合いが増えたといい下橋さん。「年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる」という、サミエル・ウルマンの『青春』という詩が大好きなんです。いつまでも探究心を持って生きていきたいですね」。

Challenge 2

退職後、木工の世界へ飛び込んだ。その高い技術で、数々の賞を受賞。思ったものをカタチにする喜び、木工に終わりは無い！



木地師という生き方！

みよし・こうじろう
三好 幸二郎さん
(71歳・宮園上)

昨年10月に行われた第38回宮島特産品振興大会で、2年連続新宮島ブランド大賞（県知事賞）に選ばれたのが三好幸二郎さんだ。三好さんが作り出す作品は、日本伝統工芸展に2回入選、また広島県美術展に6年連続入選し、昨年は奨励賞を受賞するなど、その評価は高い。三好さんは、住居とは別に原に工房を構え、日々製作に汗を流している。小さい頃からものづくりが好きだったという三好さん。マツダ㈱に入社後、「クレイ」と呼ばれる特殊な粘土を使ってデザイン画を立体化し、自動車の模型を作る「クレイモデラー」として活躍し、「コスモスポーツ」なども手掛けたという。

Old Rookie

人生は、いつだって挑戦だ



第38回宮島特産品振興大会で、新宮島ブランド大賞（県知事賞）に選ばれた菓子器と茶器のセット。「屋外でお茶を楽しもう」と題され、コンパクトに収まり、持ち運びに便利。材料は、サクラ・トチ・ケヤキ。妻の美紀子さんも商工会会長賞に輝き、夫婦そろって2年連続ダブル入賞した。

「退職後、森林ボランティアをしていたときに、積み上げられている間伐材を見て『何かに利用できないか』と思ったのがそもそものきっかけです」。

その後、宮島伝統産業会館で行われた木工口クロの後継者育成事業に参加し、そこで基礎を学んだ。

三好さんが取り組む木工口クロは、「刃」が命。切れ具合や、角度、また、同じ木でも場所によって固さが異なるため、「刃」の良し悪しで作品がまったく変わるという。そのため「刃」は手作り、これが作れないと口

クロは始まらないという。

それを宮島細工の伝統工芸士である藤本悟さんから教わった。「半年間は口クロをさせてもらえず、『刃』の作り方ばかり教わりました。しかし、今になって分かったことですが、あのときがなければ、今はありません」。

作品は、削っては乾燥させ、また削っては乾燥を繰り返し、最後に漆を塗る。そのため、一つの作品が出来上がるまでには約1年かかるとのこと。「こんなものがあったらいいなと思うものを作りますよ、自分の思い通りの物が出来上がったとき

の喜びは、何ものにも代えがたいですね」。

また、三好さんは、「地域を活性化するために、何かお役に立てないか」と、「原 たくみの会」を8年前に立ち上げ、代表を務めている。現在メンバーは8人。定年退職者を中心に、ジャンルは不問で、宮島彫りや陶芸、絵画などの創作活動に取り組んでいる。年1回、作品展を開催するほか、地元の小学校に教えに行くことも多いという。「年を取るとペースは落ちますが、木工に終わりはありません。これからは挑戦し続けます」と話してくれた。